日韓発掘調査交流を終えて

2006年度に、奈良文化財研究所と大韓民国・国立慶州文化財研究所との間で「日韓共同発掘調査交流協約」が締結されました。これに基づいて2006年度より、それぞれの研究所の研究員が、一年に一度、双方の研究所に２ヶ月程度滞在するという形の交流が行われています。私はその日本人２人目の交換研究員として、2007年９月18日から11月15日まで、国立慶州文化財研究所に滞在しました。

慶州でいくつかおこなわれていた発掘現場の中で、私は四天王寺址と月城垓子の発掘調査に参加しました。四天王寺は７世紀後半に創建され、韓半島で一金堂二塔形式の伽藍が初めて採用された寺院です。戦前に緑釉・褐釉を施した四天王像塼が出土したことで大変有名です。また、月城は新羅の王宮で、その周囲を巡る濠を韓国語で垓子と呼びます。濠は４世紀頃から統一新羅にかけて何度か作り変えられています。いずれの遺跡も、日本、ひいては東アジアの古代文化を考える上で非常に興味深い遺跡です。

特に四天王寺址は遺構の遺存状態が良好で、建物の基壇の高まりが１mあまり残っていたり、礎石の大部分が元の位置に据わっていました。日本でもなかなか発掘することができないような、考古学者や建築史学者垂涎（すいぜん）の素晴らしい遺跡です。

2006年には西塔・西面回廊の調査をおこない、今回は金堂の調査がメインとなりました。調査の結果、金堂の規模や構造を具体的に確認することができました。さらに、戦前の調査では不明確だった階段の構造までも明らかになりました。

現場での作業は大変楽しいものでした。基壇土の掘削中に、緑釉塼の破片が多く出土して大変興奮しましたし、調査の進め方を確認し合う中で、それぞれの国の調査方法や遺跡に対する考え方が少しずつ違うことを、日々、学ぶことができました。また、研究員や作業員の方々は根気強く私のカタコトの韓国語を聞き取ろうとしてくださったうえに、測量や実測など、様々な仕事を一緒に取り組もうとしてくださいました。測量は複数の人がチームとなっておこなうため、韓国語がちゃんと理解できていなければ、正確な記録を残すことができません。その調査にとって致命的なミスをひきおこさないかと、作業中は終始緊張していたように思います。

今後も継続して、日韓発掘調査交流を中心とした共同研究を進める予定です。2008年の１月～３月には、韓国から２名の交換研究員が来日し、甘樫丘東麓遺跡や、平城宮東院地区の発掘調査に参加しました。日韓の研究員がお互いの発掘調査に参加することは、研究成果を生み出す過程の共有につながり、両研究所にとって大変刺激のある交流であるといえます。このような交流を踏まえて、大きな研究成果があがることが期待されます。

（都城発掘調査部　中川 あや）

慶州の位置

四天王寺址調査前全景（上が北）

四天王寺発掘調査チームと（中央が筆者）